

小林 登
(Kobayashi Noboru)



医学博士、東京大学名誉教授、国立小児病院名誉院長、チャイルドリサーチネットワーク所長、子どもの虹情報研修センター(日本虐待・思春期問題情報研修センター)センター長。日本子ども学会代表、日本赤ちゃん学会名誉理事長(前理事長)、日本母乳保育学会名誉理事長(前理事長)、日本子ども虐待防止学会理事(前会長)。

1927年東京生まれ。54年東京大学医学部医学科卒業。国際小児科学会会長、国立小児病院医療センター 初代センター長、国立小児病院院長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞(1984年11月)、毎日出版文化賞(1985年10月)、国際小児科学会賞(1986年7月)、勲二等瑞宝章(2001年秋)、武見記念賞(2003年12月)などを受賞。

主な著作は小児医学専門書以外には、「ヒューマンサイエンス」(中山書店)、「子どもは未来である」(メディアサイエンス社)、「育つ育てるふれあいの子育て」(風濤社)、「風韻怎思—子どものいのちを見つめて」(小学館)その他多数。

子どもにとって生きる喜びは、いつでもどこでも大切なもの

情動の「子ども学」

チャイルドリサーチネットワーク所長 東京大学名誉教授 国立小児病院名誉院長
小林登 (医学博士)

子どもの体が成長し心が発達するには、日々の生活の中で子どもが「学ぶ喜び」そして「遊ぶ喜び」で、「生きる喜び“Joie de Vivre”」になることを、いつでもどこでも持つことが必須である。小児科医が、診療現場で診る「情緒(母性)剥奪症候群」などの事例を見ればそれは明らかである。ヨーロッパでは、中世の時代から「孤児院の子どもは、どんなに栄養が良くても育たない」、「赤毛のアンは皆に可愛がられるので良く育つ」と言われてきた。われわれは、その昔から子どもが育つには「生きる喜び一杯」になることが必要であることを、どの様な社会でも知っていたのである。

しかし、それはどの様なメカニズムなのかと言うと不明な点が多い。最近では血中の成長ホルモンを測ることができる。すくすく育っている子ども達は睡眠中に、成長ホルモンが血中にピューピューと分泌される一方、愛されない、可愛がられない子ども達では、睡眠のリズムも乱れ、その分泌低下が見られることが証明されている。「生きる喜び一杯」になれず、生体リズムが狂うことが原因とされている。しかし、何故リズムが狂うかは脳科学的には充分説明されていない。

子どもの心と体の関係を説明するには、人間の脳は「生存脳」、「本能・情動脳」そして「知性・理性」から成ると言う脳の三位一体学説が良いと考えている。人間の脳の原型は脊椎動物になってから出来たと言われる。脊椎動物で最も原始的な爬虫類や魚の脳は、呼吸・循環・運動などの限られた体のプログラムだけを持った「生存脳」と呼べるものである。

進化が進み、原始的な哺乳動物になると、「生存脳」の体のプログラムの働きを強めるために、本能とか情動の心のプログラムを持った皮質(脳表面の薄い膜)が「生存脳」をカバーして、「本能・情動脳」になったのである。食欲・性欲のような本能のプログラムは、生きるため、子孫を残すのに大きな役を果たし、怒りや恐れなどの情動の心のプログラムは、生命競争の中で、自らの生命を守ったり、喜びや愛などの情動の心のプログラムは家族や仲間との親しい関係を作ったりするために必要だったのである。この様な脳は、「本能・情動脳」と呼ぶことができ、たくましく生きる力を作り出す脳なのである。

さらに進化して高等哺乳動物になると、「本能・情動脳」や「生存脳」を上手く働かせ、生活環境の自然と上手く適応し、仲間との親しい関係ばかりでなく、他の種の動物といろいろな関係を保って生きるため、理性や知性のプログラムを持った新しい皮質が、「本能・情動脳」をカバーした。これは、「理性・知性脳」と呼べる。さらに大脳皮質全般、特に前頭葉のそれがより良く発達したものが、われわれ、人間の脳という事になる。

したがって、われわれの脳は「生存脳」、「本能・情動脳」、「知性・理性脳」という3つの脳から成る三層構造をしているといえる。その中央にある「本能・情動脳」が、生存のプログラムをコントロールしたり、理性・知性の心のプログラムを働かせたりして、「生きる喜び」のような情動をつかさどっていることは、脳進化から見れば当然と言えよう。即ち、情動の心のプログラムを働かせることは、子どもの成長・発達にとって必須なのである。

しかし、こういった情動のプログラムを働かせて、「生きる喜び」一杯するには、社会技術として育児・保育・教育のいろいろなやり方が必要である。より良い技術を考えるには、脳科学だけでなく、心理学・教育学・小児科学・小児生態学など、学際的に考えなければならない。それを考えるのが「子ども学」であることは、子どもに関心のある皆さんもお分かりであろう。